



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	カナダの言語教育
Author(s)	杉田, 洋
Citation	東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要(11): 59-63
Issue Date	2001-03
URL	http://hdl.handle.net/2309/42915
Publisher	
Rights	

カナダの言語教育

杉田 洋*

概要

文部省海外子女教育課(当時)の援助を得て、2000年(平成12年)9月26日より10月11日までの期間カナダに滞在し、新しい言語教育の実践現場を視察した。以下はその報告である。すでに海外子女教育課に提出した報告書の内容を含む。

背景

カナダでは、英語、フランス語の二言語が公用語として使用されており、また、公立、市立の学校には、多様な言語および文化的背景をもつ移民・外国人児童生徒が在籍していることから、言語教育の分野で実験的、先進的な試みが行われ、効果的な施策および方法が開発されてきた。学習させようとする言語を、社会科などの教科内容の学習を通して教える「イマージョン(immersion)教育」がとくに有名であるが、最近では、それに代わるもの、あるいはそれを補完するものとして、いくつかの新しい方法が提案され、注目を集めている。

東部、オンタリオ州トロント(Toronto)地区教育委員会が管轄する小学校では、移民・外国人児童生徒への母語教育が、国際理解教育を視野にいれた複数の方法により試みられている。一方、西部、ブリティッシュコロンビア州バンクーバー(Vancouver)市の小学校では、きわめて少ない授業時間数で大きな効果をあげるとされる新しい言語教育法を開発した研究者による、実践指導と教員養成が1999年度から展開されている。

教育現場で実地の参与観察を行い、さらに、教育委員会担当官、教員、研究・開発者、児童生徒、保護者などと面談して意見を交わすことによって、日本の海外子女ならびに外国人児童生徒への言語教育と、一般児童生徒への外国語教育を推進する上で大いに役立つ具体的、实际的知見が得られると考え、この視察を実施することにした。

トロント市の国際言語教育(2000年9月26日～10月3日)

トロントおよび周辺の7つの自治体が統合(amalgamation)されて1998年1月1日に誕生した新

*東京学芸大学海外子女教育センター

しい「トロント市」(The City of Toronto)は、それまでの7つの教育委員会(shchool boards)をまとめて、一つの「トロント地区教育委員会」(The Toronto District Shcool Board)を発足させた。管轄下の各公立学校では、英語とフランス語以外を母語とする児童生徒が一言語につき25人以上いる場合に、保護者の投票で過半数の賛成が得られれば、公費により、一週につき150分(2時間半)の「国際言語」(international languages)クラスを運営することが認められる。2000年度は、幼稚園から8年生までの段階で35の言語が教えられている。

国際言語クラスは、地区教育委員会の「国際言語室」(International Languages Office)の管轄下に置かれ、予算面で一般のクラスとはっきり区別されている。授業担当者は、すべて当該言語のネイティブスピーカーであり、一般教員より高い時間単価で雇用された特別身分の非常勤教員である。教員免許は原則として要求されない。授業は、とくに必要のないかぎり英語を使用せず、対象の言語で行われる。基本カリキュラムと基礎教材は国際言語室の開発によるものであり、応用・補助教材は各学校の担当教員が作成したものである。

1週150分をどのように配分するかは、各学校の自由である。「統合プログラム」(integrated programs)では、1回40分、週4日として通常の時間割の中に組み込んでいる。「放課後プログラム」(afterhours programs)では、午後3時以後、一般の児童生徒が帰宅した後で国際言語クラスを開いている。「土曜日プログラム」(Saturday programs)では、土曜日の午前中に150分の授業をまとめて行っている。

トロント地区教育委員会国際言語室長のサンドラ・バージェス(Sandra Burges)氏(当時)の紹介により、次の4つの学校を訪問した:「ライアスン校」(Ryerson Community School)、「ダングラス校」(Dundas Junior Public School)、「レスリービル校」(Leslieville Junior Public School)、「トロント国語教室」である。

ライアスン校

ライアスン校では、40分授業を週に4回行う統合プログラムを採用している。対象の言語は、広東語、北京語、ベトナム語、スペイン語である。参加者のほぼ半数が英語を十分に話すことのできない移民児童生徒であり、ほぼ半数がトロントで非英語家庭に生まれた児童生徒である。国際言語クラスは、前者にとっては「母語教育」の役目を、後者にとっては「継承語(heritage language)教育」の役目を果たしている。

文字の教育はきわめて普通の伝統的方法で行われるが、読み、作文、会話などの教育は、具体的なテーマを中心とした共同研究、ロールプレイ、ドラマなどを通じて行われる。総合的学習およびイマージョン学習の色彩がある。子どもたちの対象言語能力はまちまちであるが、どのクラスでも、移民児童生徒が非英語家庭の子どもたちをよく助け、20人程度という小さな学級サイズの効果もあって、授業は楽しくスムーズに進行する。

レスリービル校

レスリービル校では、放課後プログラムを採用し、通常時間割の終了後、40分ほどの延長時間を設けて、広東語、北京語、ベトナム語、ポルトガル語の授業を週に4回行っている。内容と方法はライアスン校の場合とほぼ同様である。校長（当時）のスリンダー・シャーマ (Surinder Sharma) 氏は、母語・継承語教育の草分け的存在であり、地区全体の教員の研修・養成に当たっている。

ダングス校

ダングス校は、国際言語の時間150分を2日に分け、通常時間割の中で、全校の児童生徒が義務的に履修する「国際理解」の時間として運用している。この点で、このプログラムは他校のそれと大きく異なる。この方式の採用は、保護者の投票によって支持されている。

2000年度は、広東語、ベトナム語、スワヒリ語の三言語を全児童が学習する。たとえば、スワヒリ語の授業では、英語とスワヒリ語のバイリンガルである教員が、必要に応じて両言語を使い分けながら教える。上級のクラスでは、4～5人でひとつのグループを作り、「アフリカ諸国の発展」、「ネルソン・マンデラ氏の業績」などのトピックについて、インターネットからの情報も取り入れながら共同研究を行い、競合・競争と相互補完の両方の要素をもった研究発表を行う。印象的なのは、アフリカ系の児童が、グループの枠を越え、誇りに満ちた表情で積極的に助言、指導に当たっていることである。

トロント国語教室

トロント国語教室は、地区教育委員会に認定され、予算の配分を受けている教育機関であり、国際言語の150分を土曜日の午前中にまとめて、日本語での教育に充てている。主として、日本人永住者あるいは日系人の子どもたちを対象としており、「トロント補習授業校」とは対象者を異にする。国語（日本語）と算数（数学）を中心に高度なカリキュラムを組んでいる。幼稚園児から高校生までのクラスをもつ。土曜日が開かれていることから、保護者の教育支援参加が活発である。

視察後の印象

上記4校とも、国際言語の週150分を使って、公費で言語教育を行っている点では同じであるが、カリキュラムや時間割の具体的運用は、個々の学校の裁量で自由に行われている。予算は国際言語室を通じて交付され、その中から、人件費を含むすべての経費をまかなう。予算系統が異なることから、ごく最近、学校が、自校で行われる国際言語プログラムに対して少なからぬ額の「施設使用料」を請求するということが起こっている。母語・継承語教育が移民あるいは非英語家庭の児童生徒の言語適応と発達支援に大きな役割を果たしていることが評価される一方、受益

者が限られていることから、納税者の側の不公平感が強くなる傾向がある。ダングラス校の試みは、摩擦を回避する一つの方策であるといえよう。

バンクーバー市の新言語教育（2000年10月4日～11日）

バンクーバー市では、ひとつの新しい言語教授法の調査のみに集中した。トロント大学オンタリオ教育研究所 (Ontario Institute for Studies in Education of the University of Toronto、略称OISE/UT) 出身の言語教育研究・実践者であるウエンディー・マクスウエル (Wendy Maxwell) 氏の開発による、「加速統合法」 (Accelerative Integrated Method) または「ジェスチャー法」 (Gesture Method) の適用実態と効果の調査である。幼稚園児から小学6年生までの児童を対象としたフランス語教育の方法としてこの教授法を開発し、実践と教員養成に当たってきたマクスウエル氏は、その実績を高く評価されて、1998年度の「最優秀教員」 (Teacher of the Year) に選ばれ、カナダ首相賞を受賞した。現在、バンクーバー市で、幼稚園から高校までの学年をもつ私立女子高である「ヨークハウス校」 (York House School) の特別客員教員として、フランス語の授業を担当し、また、市内および周辺地域の教員の指導に当たっている。

ヨークハウス校では、従来のイメージ方式の名残である毎日2時間のフランス語コースも設けられているが、「加速統合法」の真価は、毎日30分で週5授業時、合計150分だけの短時間コースで最大に発揮される。フランス語を全く知らずに9月の半ばに入学した5～6歳の最年少クラスの子どもたちが、12回（計6時間）の授業の後で、すでに教室での簡単な会話ができるようになっている。



また、授業に出てきた単語が読めるようになっていて、しかも、そのうちのいくつかは、スペリングのまちがいはあるものの、なんとか書けるようになっている。クラスの中でのことばはすべてフランス語であり、緊急の場合を除いて、英語は決して聞こえてこない。クラスの外でも、子どもと担当教員との話は原則としてすべてフランス語である。クラスの最大人数は20である。

この教授法は、身振り、手振り、身体の運動などを最大限に利用する。動作や感情、感覚を意味する単語のひとつひとつに、厳密に定義された、曖昧性のないジェスチャーが定められている。クラスで習う単語は、常にそのリストが教室に掲げられており、明確なジェスチャーつきで提示される。子どもたちは、目で単語を認知し、ジェスチャーで示される意味との連合を頭の中で構成していく。授業では、すでに幼少のころに英語で聞いて知っている楽しい物語、たとえば「三匹の子豚」などをフランス語で聞き、ことばの意味を身体で表現し、登場人物・動物のセリフを覚え、文字で読み、書き、歌を歌い、少しずつ役を演じて、学期の終わりには、全員が舞台上

がってフランス語によるドラマを披露する。教科学習を含んだイマージョン教育とは異なり、加速統合法では、短時間でまず楽しくことばの基礎を身につけさせようとするのである。効果は絶大であるといつてよい。

マクスウエル氏の夫であるマット・マクスウエル (Matt Maxwell) 氏は、音楽を取り入れた言語教育の研究者ならびに作曲家として著名であり、夫妻は、他の教員とともに、紙による教材、CD、DVDやコンピューター・ソフトウェアによる教材を次々に開発中である。小さく始まった教員研修プログラムも、次第に組織的なものになりつつある。この教授法の客観的なアセスメントは、現在、同じブリティッシュコロンビア州にあるサイモン・フレーザー大学の研究者などによって開始されている。報告が待たれる。

結 語

トロントでは、長年にわたって熟成されてきた母語・継承語教育のしくみと方法を見ることができ、また、それが国際理解教育と統合された新しい形に接することができた。両者とも、日本における外国人児童生徒教育を考えるときに大いに参考になる事例である。バンクーバーでの加速統合法との出会いは衝撃的であった。年少の帰国子女への既習言語維持伸長教育、日本の小学校での英語教育、外国人児童生徒への日本語教育や母語教育などへの応用についての検討を、開発者のマクスウエル氏と開始したところである。

今回の視察・調査に当たっては、教育委員会の担当官および各学校の校長、教員をはじめとする関係者、児童生徒、保護者から多大の協力を得た。さらに、トロント大学ニューカレッジの中島和子教授、トロント大学オンタリオ教育研究所のジム・カミンズ (Jim Cummins) 教授から貴重な助言、指導を得た。文部省海外子女教育課 (当時) からは渡航費、滞在費の援助を得た。特に記して感謝申し上げる。

参考資料

トロント地区教育委員会の国際言語プログラムに関する資料は、現在収集中である。東京学芸大学海外子女教育センターのホームページ内に情報リストを掲載し、しかるべき機関へのリンクを示す予定である。ダングス校でのスワヒリ語クラスにおけるアフリカ理解授業の基礎になっている Black Cultural Heritage Programme, History Unit 1, 2 and 3 (Toronto Board of Education (当時), 1989) が興味深い。加速統合法についても、ホームページで情報を示す。方法とその効果については、マクスウエル氏の修士論文 Research into the effectiveness of the Accelerative Integrated Method (Department of Curriculum, Ontario Institute for Studies in Education of the University of Toronto, 2000) に詳しく記述されている。